特集

自分らしく働く

一人一人、得意なことと苦手なこと、できることとできないことは違います。誰にでも得意なことと苦手なことの程度に「違い」があり、その違いが「その人らしさ」につながっています。「その人らしさ」に合わせた働き方がもっと広がったら？

今月号では、自分らしく働いている人の姿や周囲の取り組みを紹介。違いを理解し合いながら共に働くためには何が必要なのか、一緒に考えてみませんか。

■三幸電機 株式会社 三重工場

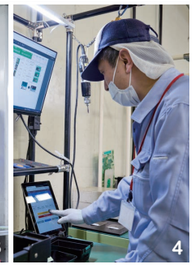
「自分にもできる」と前向きになれた

松原 裕一郎さん

小さいころから覚えることが苦手でした。頑張って勉強するけれど覚えられなくて、「みんなは、なんでできるの？」と不思議に思っていました。優しい友達に恵まれたので、「できない」と打ち明けると、「教えたるわ」と宿題を手伝ってくれた思い出も。自分自身の明るい性格もあり、子ども時代は楽しく過ごせていました。

「このままじゃ将来が不安」と思うようになったのは、社会人になってから。上司から仕事を教えてもらっても、覚えられない。「ノートに書けよ」と言われて書いてみても、記憶に定着しない。後から入社した後輩が先に仕事を覚えていく様子を見て、「これはおかしい」と思うように。そんなとき、当時の上司から受診を勧められました。病院で ADHD(注意欠如・多動症) と診断されたとき、やっぱりと納得できました。

ハローワークを通じて今の職場に来て、もうすぐ 3 年です。端的な指示がタブレット端末を通して与えられるので、「自分にもできる」と前向きになれました。自分で考えて仕事ができるようになり、自信がつきました。



1. 創業 70 年を超える電子機器メーカーの三幸電機株式会社。北勢町にある三重工場 2. 黙々と作業を進める 3. 進捗状況などを把握できるツールを自社で開発し、作業工程を可視化 4. タブレット端末で次の作業を確認

「働きやすさ」が生む多様な雇用

「見える化」と「スマート化」を進めたら

現在、障がいのある５人が働いています。雇用する際、人と接するのが苦手な人が多いことが分かりました。

我が社では、以前からマニュアルを映像にしたり、従業員一人一人にタブレット端末を配布して進捗状況を確認できたりと、業務の「見える化」と「スマート化」を進めていました。会話しなくても仕事ができる環境が整っていたので、一人で黙々と作業できる業務を用意できました。業務の「見える化」と「スマート化」といった働きやすさを追求した結果、障がいのある人たちの雇用につながりました。

腫れ物に触れるような態度はやめよう

障がいのある人の雇用に当たって、従業員たちには「腫れ物に触れるような態度はやめよう」と伝えました。本人の承諾の上、障がいのことを職場で情報共有しています。お互いが幸せになるには、偏見を持たずに理解し合うことが必要だと考えています。

大きな数が苦手な人は、数の管理が少ない業務に携わっています。周囲が障がいを理解していたので、苦手なことに素早く気付いて対応できました。仕事内容と本人の特性をマッチングさせることは、長く勤めてもらう上で大事です。

雇用主と従業員、双方の相談にのってくれる第三者の存在も必要不可欠です。我が社でも、ハローワークや「障害者就業・生活支援センターそういん」などの相談できる機関を活用しています。今後、一層のフォロー体制の充実が求められると感じています。

三幸電機 株式会社
常務取締役

中村 厚郎さん

一緒に働いてみて

出口 陽一さん

松原さん（左）と上司の出口さん（右）

松原さんは誠実な働きぶりなので、助かっています。元気のない人がいたら声をかけるなど、チームのムードメーカーのような存在です。

「働く」とは

必要とされる居場所があること

員弁町の畑で低農薬の野菜を栽培している株式会社絆では、20 ～ 65 歳の 18 人が、必要とされる喜びを感じながら自分らしく働いています。

1. 員弁町の畑でナバナの収穫作業 2.1 年間で 36 品種を育てる 3. ネギの出荷作業。きれいにした後、袋詰めする 4. ラベルシール貼り 5. 出荷作業は時間との勝負！店舗の売れ行きに応じて出荷量を調整 6. 出荷前のブロッコリー、ナバナ、ネギ 7. 自動車部品の検査の軽作業

株式会社 絆
就労継続支援 A 型事業所

支援員
神谷 直美さん（左）

代表取締役
奥岡 司朗さん（右）

「農作業中の利用者に地域の人が声をかけてくれます。自分の存在を認めてもらえていると感じるようで、こうした関わりはうれしいです」と話す神谷さん

笑顔で帰ってほしい

奥岡さん：地域の高齢者から「畑をようせんわ」という声を多く聞きました。耕作放棄地が増え、野菜を作る人が減っていく状況を見て、「何とかしやな」と思っていたとき、知人から障がいのある人が農業をしていることを聞きました。障がいのある人の働く場になればと思い、農作業を行う就労継続支援 A 型事業所を設立。種から育てて収穫の喜びを味わえる場になりました。その後、障がいによっては農作業ができない人もいると分かり、部品の検査などの軽作業も取り扱うようになりました。

神谷さん：青空の下で農作業をすると、だんだんと気持ちも晴れて明るくなっていきます。みんなに作業を頼むときは「あなただからできる」と伝えています。人は必要とされていると実感できると、自信がつき、笑顔が増えていきます。絆のみんなには毎日笑顔で帰ってほしいです。そして、笑顔で出勤してくれると信じています。

元気になって羽ばたいていくことを願って

神谷さん：「重いものを持てない」「苗と草の見分けができない」など、それぞれの障がいをみんなが理解しています。一人一人に合った手助けと、合った仕事に取り組むことが自分らしく働くことにつながります。ここで自信をつけて、元気になって羽ばたいていってほしいです。

自分にも居場所ってあるんだなって思った

山崎 正樹さん

もともと花が好きだったので、絆では農作業を希望した。農作業は重労働やけど、自分に合っていると感じる。農作業をしたり、出荷作業を手伝ったりしている。緊張しぃやけど、絆のみんなとは話しやすい。

仕事をしていると、自分のことを「頑張っているな」と認めることができる。絆に来て、始めてそう思えた。自分にも居場所ってあるんだなって思った。働くことで、社会とつながっているなと感じる。これからも、働き続けたいと思う。

体を動かして汗をかくことが自分には良かった

Y さん

部品工場に勤めていたけど、ある日パタッと出勤できなくなった。勤務先の人に責められたり否定されたりしていて、今振り返るとパワハラだったと思う。目の病気も重なり、悲観するようになっていった。4 年ほど家にこもっていた。その後、相談支援専門員と相談して絆に行くことに。絆では農作業を担当。農作業で体を動かして汗をかくことが、自分には良かった。昔の自分に声をかけるなら、「もっと早く辞めな」と言うと思う。

社会とのつながり

市内の生活困窮世帯の支援や不登校児童、ひきこもりの人への学習と就労を支援している「NPO 法人ヴェリタス」の理事長 服部邦夫さんに「社会とのつながり」について聞きました。

special interview

NPO 法人 ヴェリタス
理事長
服部 邦夫さん

ヴェリタスとは

生活困窮世帯への支援や不登校、ひきこもりの人の学習と就労を支援しているNPO 法人です。本人以外の家族からの相談も応じます。相談・支援無料。秘密厳守。

問 NPO法人 ヴェリタス
T 37-4818

人との関わり「長期戦は当たり前」

ヴェリタスを設立して今年で10年目。服部さんの担当は、ひきこもりの人の就労支援です。ひきこもりの人の自宅に通い、7年目にようやく本人と会えたこともありました。

「小学6年生から引きこもり、暗い部屋でずっとケータイを見ている子がいました。訪問しても一言も話さない日が続きましたが、ふとしたきっかけで会話が始まり、数年かけて信頼関係を築いたタイミングで、就労を勧めました」

履歴書の書き方を支援し、職場実習の日程も調整。就職して、給料で好きなものを買える喜びを知ったようでした。

ひきこもりの人への支援で、多くの人が「働きたい」という思いを抱えていると知った服部さん。ひきこもりの状態は一人一人違い、さまざまな理由で外との交流ができない人もたくさんいます。服部さんは「焦らずにゆっくりと家族や本人との信頼関係を築くことが何より大事」と話します。

少しずつ会話ができるようになり、外に出られるようになって、新たな道に進む気持ちが固まったときに一緒に仕事を探します。市内の企業とも連携し、得意なことが生かせる就労先の確保にも取り組んでいます。

「社会とのつながり」が人を育てる

受験がきっかけで41年間引きこもっていた人がいました。服部さんが支援に関わって、1年ほどで外出できるようになりました。服部さんは、「ずっと関わってくれる人を待っていたのでは」と感じたそうです。

少しずつ人との関わりを広げ、焦らずに自分に合った生き方を選択し、希望を持って生活できるように。服部さんは「社会とのつながりが人を育てる」と信じて活動しています。

図書館の本紹介

「得意」と「苦手」を持ちながら、自分らしく働くヒントが書かれた本を紹介。

注文に時間がかかるカフェ たとえば「あ行」が苦手な君に　大平一枝著 ポプラ社

きつ音で「いらっしゃいませ」、メニュー、代金が言えず接客アルバイトを諦めてきた若者たちが、奇想天外な1Dayカフェを始めた。温かな感動ノンフィクション。

自分らしく働けるように

障がいのある人の生活面と就業面の相談支援を行っている「障害者就業・生活支援センターそういん」のセンター長 中村弘樹さんに「理解し合う」ことについて聞きました。

お互いの理解が広まると、選択肢が増えていく

障がい者雇用は、企業の採用担当者だけが取り組むものではありません。障がいのある人が働きやすい環境は、みんなにとっても働きやすい環境につながるからです。それには一緒に働く人が、障がいにとらわれず、相手の「個性」を理解することが大切です。

口頭の指示が苦手な人がいました。職場が本人の個性を理解してマニュアルを作成したら、滞りなく仕事ができるように。個性への理解が広まると、本来の力を発揮できるようになります。

また、障がい者雇用ではなくても、企業と福祉がつながることで、多様な選択肢が生まれます。障がいのある人の中には、高い集中力で黙々と作業することが得意な人がいます。その得意を生かして、企業から福祉事業所に内職を発注し、企業の生産性を上げたケースがありました。本人と企業の双方にとって、働き方が多様になることで選択肢が広がっていきます。

障がい者総合相談支援センターそういん
障害者就業・生活支援センターそういん
センター長
中村 弘樹さん
（医療法人 北勢会）

個性への理解で働きやすくなった例

勉強が得意で、複数のことを同時に考えるのは苦手。同時に複数のことを考える研究職から、一つずつ完結できる事務職に変更。長く働けるようになりました。

頑張り屋さんで、コミュニケーションを取るのは苦手。職場で相談しやすい人を決め、定期的に相談する環境を整えたことで、安心して働けるようになりました。

さまざまなサポートがあります

【事業主の皆さんへ】
研修会の実施や障がいの特性についての説明、雇用後の定期訪問（定着支援）、仕事の切り出し方の相談などを受け付けています。

【当事者の皆さんへ】
働く障がいのある人の集い「ひまわりサークル」を開催しています。

問 障害者就業・生活支援センターそういん　T 27-7188

特集

自分らしく働く

少しの工夫を加えた多様な働き方があれば、苦手やできないことに隠れていた「得意」や「できること」が顔を出すかもしれません。一緒に働いている人を見て、「こうしたら、もっと働きやすくなるかも」と気付いたら、みんなで話し合ってみませんか。小さな気付きの積み重ねが、誰もが「自分らしく働く」ことにつながるのではないでしょうか。